

【論文】

IPE 基盤型専門職教育プログラムの開発プロセスと課題

渡邊 洋子・奥菌 淳二・角山 香織・佐伯 知子・種村 文孝

Development Process and Challenges of IPE(InterProfessional Education)-Based Professional Training/Education Program

WATANABE, Yoko & OKUZONO, Junji & KADOYAMA, Kaori
& SAEKI, Tomoko & TANEMURA, Fumitaka

1. はじめに

本論は、IPE (InterProfessional Education) の原理を基盤に、新たな専門職教育プログラムの開発を目指す多職種構成チームの取り組みを省察的に跡づけ、同プロセスを吟味・検討するとともに、その作業を通し、IPE 基盤型専門職プログラムの特徴と課題を明確にすることを旨とするものである。

IPE には、大別して二つのタイプがある。一方の IPE は近年、医療福祉分野で急速に導入が進む「多職種連携教育」として知られる。チーム医療など医療現場での協働・連携を指す IPW (InterProfessional Work) をより円滑かつ効果的に実現するための<IPW 直結型 IPE>である。これに対し、本論ではビジネス分野の異業種交流に近い<多職種／他業種交流型 IPE>が、専門職の研修において果たす意義と役割に注目する。具体的には、医療、企業、行政、保育、社会教育 (図書館・博物館・ユースサービス等)、法律、学術研究、芸術などの専門職や専門職教育者が集い、実践・教育課題を分かち合う活動を指す。

2. IPE 研究会の活動経過と専門職教育の課題

筆頭著者が IPE の意義と可能性を認識したのは、2006 年度、医療系専門職教員を中心とする異領域・異業種の「医療と教育を考える勉強会」に始まる。二つの科研 (2008-10 年度「医学教育従事者の専門職研修に関する成人教育学の実践研究—教育学専攻者を中心に」、および 11-13 年度「専門職教育と専門職性に関する異業種間比較研究—成人教育学の観点から」) における、特に医学教育との関わり、およびそこでの「異文化体験」の中で、IPE 概念と出会い、多職種・異業種の観点からの専門職教育の可能性に注目するようになった。

また生涯継続教育 (Continuing Professional Development) に造詣の深い Peter Jarvis 教授を 2011 年・13 年に招聘し、2013 年 3 月に、IPE セッション「職業人の成長と経験をシェアする—英国成人教育・生涯学習研究社ピーター・ジャービスとともに」を開催した¹。それを起点に、関西 IPE 研究会²を設立し、定例研究会や独立ウェブサイト設置を通して IPE

活動の可能性についての検討を重ね、2014 年 3 月には、IPE 公開ワークショップ 2014 in 京都大学「究極の現場から Professionalism と InterProfessionalism を考える—国際人道組織 ICRC の活動をシェアし語り合う」を企画・運営した。ICRC スタッフの特異な専門性に関わる話題提供から、参加者同士が異質なテーマを共有し、自らの日常業務と重ね合わせることが、専門職の日常的な仕事や活動の振り返りに有益なことを確認した³。

3. IPE 基盤型プログラム開発への取り組み

(1) IPE 研究会の新たな展開

2014 年度以降、新メンバーで関西 IPE 研究会を再組織し、科研（挑戦的萌芽研究）「専門職教育者の IPE 基盤型研修プログラムの実践開発研究」（代表者：渡邊洋子）に取り組んできた。研究メンバーは海上保安官、薬剤師、保育者養成、医師養成に携わる者などである。本研究会は、定期的な研究会の開催を心掛けてきたが、各々の本務先の繁忙期がバラバラであるため、常に困難を極めている。それゆえに、苦肉の策として、Google Hangout というインターネット・ツールを活用した「チャット会議」を導入し、意見交換や議論に活用してきた。本科学研究の究極的な目標は、「プログラム開発」であるが、「実践開発研究」を掲げていることから、実際に IPE ワークショップを企画・運営し、それを振り返る一連の作業を通じて、IPE 基盤型プログラムをどのように開発していくかを検討することとした。

以下は、本研究会のこれまでの取り組みに加え、本研究会のメンバーによる取り組みや議論の成果をまとめ、考察を加えたものである。

(2) IPE 公開ワークショップの開催

本研究会は 2014 年 4 月に結成され、メンバーの専門職域についてプレゼンテーションと議論によって相互理解を深める研究会や実地見学（海上保安大学校・大阪薬科大学など）を経て、2015 年 10 月には「公開ワークショップ 2015in 京都大学」として「InterProfessional（多職種連携・異業種交流）からプロフェッショナリズムを考える—木に関わる専門職の協業を手がかりに—」を企画・運営した。

同ワークショップの開催目的は、多様な専門職や職業人が、専門職教育や自他の職種の専門性への考えを深めることとし、想定された参加者の職種から一定の距離がある「木に関する専門職」と捉えた三者（林業従事者 A 氏、設計士 B 氏、工務店主 C 氏）を話題提供者に、それと異質性のある薬剤師と学芸員をコメンテーターとして依頼した。当日参加者は弁護士、会社員、薬剤師、行政書士、消防士、助産師、編集者など総勢 28 名であった。当日のスケジュールは、午前はアイスブレイクに加え、3 者からの話題提供、午後は主に、コメンテーターのコメントとグループワークを行った。詳細は、表 1 のとおりである。

表 1 公開ワークショップ 2015 in 京都大学の当日スケジュール

時間	内容	詳細
10:00～10:30	受付	参加者は以下のことを行なう ・名札へ名前、職業、ひとことを記入する ・動物の絵を一枚選び、名札に貼る ・くじを引く
10:30～12:45	開会あいさつ・ 趣旨説明・話題 提供者のご紹介 参加者の自己紹 介 話題提供	参加者の自己紹介では、名前、所属、選んだ動物とそれを 選んだ理由についてを発言する 話題提供者は以下の通り ・京北銘木生産協同組合 一瀬章弘氏 ・(株) R-village 藤井俊二氏 ・(株) アラキ工務店 荒木勇氏 各 20 ～30 分程度 3 名からの話題提供後、参加者は 3 種類の付箋を配布し、「自 分の業界でもあるあるという点」「自分の業界とは違うなと いう点」「その他・疑問点」を書く
12:45～14:00	昼食	
14:00～14:30	コメンテーター からのコメント	コメンテーターは以下の通り ・シップスヘルスファーマシー東日本教育研修部部長 ／主任研究員 川村和美氏 ・ヴァンジ彫刻庭園美術館学芸員 渡川智子氏
14:30～15:35	グループワーク	自己紹介後、「自分の業界でもあるあるという点」「自分の 業界にはないなという点」を KJ 法で整理する。
15:35～15:50	休憩	
15:50～17:00	全体共有・全体 総括	自分のグループの内容を全体に向けて共有する。 コメンテーター、話題提供者の感想・コメント 主催者からの全体総括

主催側から「プロであること」「プロとして働くこと」を一緒に考えていこうとの趣旨説明を行い、名札に貼った動物シールによる自己紹介の後、三氏の登壇となった。A 氏からは、林業従事者と銘木生産組合の仕事内容、ニーズに合わせた木材の調達など協業の実態が話された。B 氏からは、設計士の仕事内容、および「先生」と呼ばれる設計士が施工者や発注者と対等な関係性になることの難しさと工夫などが語られた。C 氏からは、大工は京町屋の改修などで様々な職人との協業がある一方、時代と社会変化で大工の仕事が大きく変化したことなどが挙げられた。これらを受け、参加者は 3 種類の付箋に「自分の業界でもある

あるという点」「自分の業界とは違うなという点」「その他・疑問点」の3つを書き、壁に貼けたスペースに貼って、外のレストランでの和やかなランチタイムに入った。

午後はコメンテーターの発言の後、4つのグループに分かれ、付箋に書いた3点について、グループ内で各自が発表した後、ディスカッションしながらKJ法でまとめた。グループ1では、人材育成、仕事のマネジメント、クライアントや他専門職のニーズ把握、などを中心に、プロ意識の在り方が議論された。グループ2では、「専門職の権限の壁」を中心に、マネジメント、(建築家のように)目に見えない専門性の評価、ユーザー教育の必要性などが取り上げられた。グループ3では、「先生」と呼ばれる専門職とそうでない専門職の違い、専門職のこだわりと経済合理性や効率性との衝突、などの話題を中心に議論された。グループ4では、「先生」と呼ばれることの是非(権威や説得力、対等な連携の困難)や他職種連携などが話題となった。

グループのテーブルに全員で集まる形でまとめ、内容を共有した。各グループの発表には次々と質問が出され、活発な質疑応答とそれに伴う意見交換が行われた。本格的な議論には時間が足りないとの印象を残しつつ、ワークショップは終了した⁴。

(3) 事前準備、および振り返りの多様な試み

実施に至っては、事前準備が重要な意味をもった。また実施後は、ワークショップの経験と成果をできる限り文字化・視覚化する中で、IPEプログラムの原理を明確化し、必須要素を抽出する作業を続けてきた。

① 事前準備

A コンセプトとテーマの決定

ワークショップの企画にあたっては、「木の専門職」「協業」を二つのキーワードとした。「木の専門職」は、チャット会議の近況報告の中から発想された。「協業」については、IPEの性格上、多職種・異業種のつながりがみえやすいのではと提案・検討された。

B 話題提供者との打ち合わせ

話題提供者の依頼については、事前に各交渉担当者を通して内諾を得た。当日の2、3週間前に、A氏・B氏・C氏の各々を4人のメンバーが職場を訪ね、ワークショップの趣旨説明を丁寧に行い、当日の具体的打ち合わせを行った。

C 参加者の募集・依頼

実験的企画であるため、参加者には、通常とはかなり異なる本ワークショップの特徴と趣旨を理解していただき、成果や結果が予想できない点などを了解してもらう必要があった。そのような試みに関心を抱き、柔軟で寛大な知人に声をかけることから始め、京大教育学研究科教育実践コラボレーションセンターのウェブサイトでも、募集を行った。

② 振り返りの多様な試み

D 文字化・共有化の作業

ワークショップの前半の話題提供、および後半の各グループでのディスカッションについて、録音資料を文字起こしし、その記録をメンバーで読み合い、印象に残った内容を出し合い意見交換する作業を行った。

E 「実施後の振り返り」「主催側の学び」についてのディスカッション

主催側として、実施してみてどうだったかの振り返りのディスカッションを行った。そ

の中で、「主催側が一番学んだ」との意見が出たため、「主催側として何を学んだか」を振り返る自己変容の記録化・文章化に加え、それを振り返るチャット会議を複数回、実施した。

F フォローアップ・インタビュー

実施から半年後に「参加者にとって、あのワークショップはなんだったのだろうか」「参加者は今、何を覚えているだろうか」という問いから、参加者に声をかけ、5人にインタビューを行った（うち、2人は単独面接、3人は集団面接）。当日のスケジュールなど詳細の記憶は消えていたが、印象深かったエピソードや話題、共有したイメージは残っていた。

G 振り返り懇親会の実施

「ワークショップの同窓会をやりませんか？」というニュアンスで声をかけ、4人の参加者とメンバー5人で懇親会を行った。インフォーマルなやり取りの中で、インタビューではわからなかった参加者におけるワークショップの意味や位置づけが窺えた。

H プログラム開発に向けた総括セッション

9月中旬に、総括セッションを行った。研究メンバーで集まり、7時間余りの時間をかけて、事前・実施・事後の一連のプロセスを丁寧に振り返り、各々の段階における実践的課題と「次回実施するとしたら」との前提で、普遍性をもった IPE 原理を抽出しようとした。

（４）IPE 基盤型「プログラム開発」に向けての論点—普遍性をもった IPE 原理とは

上記の振り返りの作業の中で、現時点で共有できている原理は、次のようなものである。

1. 「InterProfessional から Professional を考える」という図式を堅持する。
2. 何を扱っても「プロであること」「プロとともに働くこと」をテーマとして重視する。
3. 例示は、参加者の日常業務からできる限り遠い、非日常性ある職種・業種を選ぶ。
4. 内容構成では、「譲れない」最低限の「しかけ」は設けるが、「作り込み」はしない。
5. アイスブレイクと IPE ランチの手間と時間は、確保する。
6. 一か月後と半年後に懇親会など、振り返りの機会を設ける。

以下、これらの原理について簡単な説明を加えたい。

1の「InterProfessional から Professional を考える」の図式を堅持するというのは、IPE 基盤型「プログラム」が多様な専門職の交流を前提にしていることによる。専門職の交流や協働といった InterProfessional の要素を取り入れつつ、その多様な専門職に共通して求められるプロフェッショナルリズムを探究することが効果的と考えられる。専門職領域によって独自の価値観や考え方が見られる部分と、様々な専門職に共通する部分がある。今回のプログラム内では、グループワークを通して自らの業界との共通点・相違点を参加者が探り、他領域の専門職と意見を交わし合う中で、自分自身の専門性への理解を深めるとともに、専門職に共通の要素を探ることができたと考えられる。

2のどんなテーマや対象を扱っても「プロであること」「プロとともに働くこと」を重視

するのは、「自らがプロとしてプロと協働する」という働き方が、大半の専門職の共通基盤だからである。＜多職種／他業種交流型 IPE＞では、それぞれの専門職が抱える課題も異なるため、自分自身に引き付けて考えられるようにすることが求められる。例えば、木に関わる専門職の協業について話題提供を受けた後で、木材や建築手法に関する興味も生じることが考えられる。自身の知らない業界の話を聞いて知識を学ぶことも 1 つの学びではあるが、専門職の育成や研修という観点から捉える際には、専門職としてのあり方、一人前になるプロセス、専門職との協働の課題や可能性に焦点をあてる方が効果的だと考える。

3 の例示として「非日常性ある職種・業種を選ぶ」という点は、＜IPW 直結型 IPE＞のための企画やプログラムと異なる、大きな特徴であろう。チーム医療など現場での連携や協働に直結する IPE ならば、身近な事例を取り上げて考える方が共有しやすい。だが、様々な専門職が交流する中で学ぶ＜多職種／他業種交流型 IPE＞では、参加者の日常業務から離れているからこそ、議論を共有できるという側面が見出された。異なる専門職同士の話し合いにおいては、例示が、すべての参加者の日常業務から一定程度、距離をもつものであることにより、話し合いの共通基盤が作りやすくなったのである。すなわち、当該領域に詳しい一部の参加者が話し合いの主導権を取るのではなく、それぞれの参加者が等距離で、自分なりに考えたことを発言する機会が用意できたのだと言えよう。

また、「だれの専門領域とも異なる領域」を例示することにより、すべての参加者が普段の文脈を離れて議論することが可能になった。例えば、医療現場においては、医師、看護師、その他の医療専門職などの権力関係や利害関係が生じやすいが、それらの文脈を離れて、専門職としてのあり方を自由に考えることが可能になったと考えられる。

4 の最低限の「しかけ」は設けても「作り込み」はしない、というのは、これまで述べてきたように、テーマや設定を「専門職教育としての場にして、交流や考えを深めるための働きかけはする」が、それ以外の部分では一定の自由度や柔軟性をもたせるということである。最初からテーマを絞り込み過ぎたり、到達目標を具体的に狭く設定したり、参加者に何らかの教え込みや指示をするような方法を取ると、かえって参加者が自らの文脈や状況に引き付けて考えるのを阻害する可能性もある。後日、参加者に振り返りのインタビューを実施した際には、それぞれの参加者が独自の言葉でワークショップの感想を述べ意味づけを行っていた。オープンクエスチョンのような自由度あるプログラムだったからこそ、各参加者の学びが、それぞれの文脈に即した意味あるものになったと考えられる。

5 のアイスブレイクと IPE ランチは、事前の想定以上に重要なものであった。初対面の専門職者が短時間のうちに、安心して自分自身の考えや経験を語り、他の専門職の意見に耳を傾けられるようになるには、交流を促す工夫としてアイスブレイクやランチの時間が効果的なことが参加者の様子から実感された。一旦ランチをはさんで休憩をしながら、他の参加者と和やかに会話する時間があつたことで、午後のグループワークでの活発な意見交換が見られたことから、専門職同士が気軽に話せる空間をつくる必要がある。

6 の事後の振り返りの機会も、当初の想定以上に効果的であることが判明した。今回は、ワークショップの効果検証を兼ねた、半年後のインタビューであつたが、参加者が改めて当日の経験を思い出し振り返ることで、ワークショップの意味を再度考える機会となつていたことが伺えた。日々業務に追われる専門職であれば、ワークショップ当日に考えたことや学んだことも、次第に記憶が薄れていく。だが、このように後日、改めて振り返りの

機会を設けることにより、再び日常の仕事と関わらせながら＜多職種／他業種交流型 IPE＞の意味を考える機会を得ることが可能になる。

ただ半年後では具体的な記憶がほとんど残っていないため、振り返りの効果を高めるには、ワークショップの 1 ヶ月後、さらに半年後の 2 回程度の設定が必要であろう。プログラム企画立案にあたっては、これら後日の振り返りの機会までを含めた包括的なプログラム開発が目指されるべきと考える。

(5) 生じてきた疑問点や課題

他方、ワークショップを実施後に企画運営者の中で、いくつかの気づきや新たな問題意識が生じてきたことも、明確にしておかなければならない。それらは主に、プログラム開発の考え方、プログラム構成、参加者の確保、IPE の本来的な捉え方に関わるものである。

まず、本チームはそもそも「プログラム開発」を目指してきたのだが、それが妥当な方向性なのかという点である。また「プログラム」とは何を指すのかも、改めて検討する必要がある。さらに、多様な専門職が集い、交流をする中で学ぶのが＜多職種／他業種交流型 IPE＞であるとしても、「プログラム」という方法・形態を取ること自体、効果的なのか否か、またこの IPE を各専門職養成の中に位置づけるにはどうしたらよいのか、などの新たな問いが生じてきた。

今回のプログラム構成に関わって言えば、ワークショップの実施に当たって話題提供者が必要か否かという疑問や、午後に実施したグループ・ディスカッションだけでも十分ではないかという意見も出された。そこでは、「どんな話題提供者を呼ぶか」ではなく参加者に「何に気づいてほしいか」をもっとスキルベースで緻密に考えるべきではないかということも問われた。さらに、多くの専門職が現場で直面する課題が共通し、共通のスキルが求められるのであれば、そのスキルを伸ばす場の設定が可能ではないかというのである。

他方、参加者をどのように確保するかも課題である。＜多職種／他業種交流型 IPE＞では、どれだけ多様な職種・業種の専門職の参加が得られるかが重要な鍵となる。特定の専門職ばかりの集まりでは、互いの共通点や相違点から学ぶことを目的とする、今回のようなワークショップの実施は困難である。主催者が参加を呼びかける際にはどうしても、自身の職業と近い専門職の参加が多くなる傾向にある。普段の仕事で接する職種や業種の人ではなく、普段なかなか同席することのない多様な専門職の参加を得るには、異なる領域にネットワークをもつ複数の専門職者に、呼びかけの段階から協力していただくことも必要になろう。多職種交流や異業種交流のおもしろさに共感してもらえるテーマ設定と合わせ、幅広い領域にわたる専門職に参加していただける工夫をすることも、大きな課題である。

私たち自身にとってワークショップの企画運営という営みは、IPE の本来的な捉え方についても、改めて考えなおす契機となった。そもそも今回のワークショップは Education にあたるのかという、新たな問いも生じてきた。複数の参加者は、確かに交流を通して学び、半年後のインタビューでも、仕事について考えるきっかけになったと振り返っている。一方、ワークショップの主催側では、「主催した自分たちが一番学んだのではないか」との実感も共有されている。また今回のワークショップで Education の対象は誰であったのか、どのような働きかけが教育的であったといえるのかについて、メンバー間で改めて問題提起がなされ、問題意識が培われてきた。参加者がそれぞれに学びを得たと考えられる点は

評価しつつも、主催側としての総括をどのように行い、「次の段階」をどのように目指して取り組んでいくかが問われている。

4. IPE 基盤型専門職教育の課題

以上のように、本研究会では、専門職／専門職教育者が専門領域の壁を横断的に超える活動の共有を通して、専門職者の学びの充実や深化、活性化において InterProfessional な学びの機会が果たす役割が認識され、専門職教育の新たな発展可能性が模索されてきた。

今後は、前掲したような多くの疑問点や課題について、IPE のかかわりの中で一つ一つ丁寧に吟味しつつ、IPE にとって「プログラム」とは何かを含む、その根本原理と諸要素をより明確にし、より効果的な実践方策を探るとともに、このような学びの場に、現場のより多くの専門職／専門職教育者の参加を促すような実践的な提起を行っていきたい。

【参考文献】

- Hammock, M., Freeth, D. S., Goodman, D., and Copperman, J., Being InterProfessional, Polity, 2009,.
- Schön, D., The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action, London: Temple Smith, 1984 (ドナルド・ショーン『省察の実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』、柳沢昌一・三輪建二監訳、鳳書房、2007年)。
- Jarvis, P. The Theory and Practice of Teaching, Routledge, 2006. (ピーター・ジャーヴィス編著『生涯学習支援の理論と実践—「おしえること」の現在』、渡邊洋子・吉田正純監訳、明石書店、2011年)。
- ピエール・ブルデュー『実践感覚Ⅰ』、今村仁司・港道隆訳、みすず書房、1988年。
- エティエンヌ・ウェンガー他著『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』、櫻井祐子他訳、翔泳社、2002年。
- 奥菌淳二「海上保安大学校における IPE 実践」『特集 1 InterProfessional Education の観点から見た専門職教育』『京都大学生涯教育フィールド研究』第 3 号、2015 年、75-81 頁。
- 角山香織「京都大学薬学部 6 年制教育における多職種連携教育の取組み」『特集 1 InterProfessional Education の観点から見た専門職教育』『京都大学生涯教育フィールド研究』第 3 号、2015 年、63-74 頁。
- 佐伯知子「IPE(InterProfessional Education)をめぐる経緯と現状、課題：医療専門職養成の動向を中心に」『京都大学生涯教育フィールド研究』第 2 号、2014 年、9-19 頁。
- 佐伯知子「保育士および保育士養成をめぐる現状と課題」『特集 1 InterProfessional Education の観点から見た専門職教育』『京都大学生涯教育フィールド研究』第 3 号、2015 年、55-61 頁。
- 柴原真知子「関西 IPE 研究会 活動報告—「専門職 教育者交流会 IPE」の可能性と課題」『京都大学生涯教育フィールド研究』第 2 号、2014 年、135-141 頁。
- 種村文孝「法律専門職と市民にとっての裁判員制度：導入時の議論とその後の影響」『特集 1 InterProfessional Education の観点から見た専門職教育』『京都大学生涯教育フィールド研究』第 3 号、2015 年、83-88 頁。
- 種村文孝「実践報告 InterProfessional (多職種連携・異業種交流) からプロフェッショナリズムを考える：木に関わる専門職の協業を手がかりに」『京都大学生涯教育フィールド研究』第 4 号、2016 年、79-83 頁。

渡邊洋子「InterProfessional Education の意味と可能性：専門職／専門職教育者の新たな学び」『京都大学生涯教育フィールド研究』第 2 号、2014 年、3-8 頁。

渡邊洋子「教育学的観点からみた IPE の意義と可能性の検討に向けて」「特集 1 InterProfessional Education の観点から見た専門職教育」『京都大学生涯教育フィールド研究』第 3 号、2015 年、89-90。
科研報告書『専門職教育と専門職性に関する異業種間比較研究—成人教育学の観点から 研究成果報告』（研究代表者 渡邊洋子、平成 23 年度～25 年度科学研究費助成金(挑戦的萌芽研究)課題番号 23653244)、2014 年 3 月。

¹ 柴原真知子「関西 IPE 研究会 活動報告—「専門職 教育者交流会 IPE」の可能性と課題」『京都大学生涯教育フィールド研究』第 2 号、2014 年、135-141 頁。

² 関西 IPE 研究会の現メンバーは、以下のとおりである（五十音順）。

奥 菫 淳二（海上保安大学校）

角 山 香織（大阪薬科大学）

佐 伯 知子（大阪総合保育大学）

種 村 文孝（京都大学大学院教育学研究科博士後期課程）

渡 邊 洋子（京都大学大学院教育学研究科、科研代表者）

³ 科研報告書『専門職教育と専門職性に関する異業種間比較研究—成人教育学の観点から 研究成果報告』（研究代表者 渡邊洋子、平成 23 年度～25 年度科学研究費助成金(挑戦的萌芽研究)課題番号 23653244)、2014 年 3 月。67-80 頁。

⁴ 種村文孝「実践報告 InterProfessional (多職種連携・異業種交流) からプロフェッショナリズムを考える：木に関わる専門職の協業を手がかりに」『京都大学生涯教育フィールド研究』第 4 号、2016 年、79-83 頁。